



スポーツ、温故知新

—メディア・イベント、青少年スポーツ、ノンフィクション—

季刊誌 第6号

—2022年秋号—

一般社団法人

子ども未来・スポーツ社会文化研究所



はじめに

スポーツ、温故知新 —メディア・イベント、青少年スポーツ、ノンフィクション—

子ども未来・スポーツ社会文化研究所「季刊誌第6号：2022年秋号」をお届けします。歴史的事実は、未来の社会を考えるうえで、多くの示唆を与えてくれます。本期（第16～18回セミナー）はスポーツを対象として、日本におけるメディア・イベントの誕生について、青少年サッカーのための地域クラブの幕開けについて、日本の卓球界を牽引した荻村伊智朗の個人史について考えることで、これから日本スポーツの在り方を議論しました。

第16回セミナーでは、「忘れられた『大阪オリンピック』～1923年 メディア・イベントの誕生～」と題して、黒田勇氏（理事・関西大学名誉教授）にお話いただきました。1923年5月に開催された第6回極東競技大会（極東オリンピック）大阪大会は、現代でいう「メディア・イベント」の様相を初めて呈したスポーツイベントでした。6日間の大会期間中、陸上、水泳、野球をはじめ七競技、オープン競技として女子のテニスやバレーボールに、日本190人、フィリピン143人、中国103人の選手役員が参加しました。1913年マニラで第1回が開催、1917年には東京でも開催されましたが、マス・メディアが大きくかかわり、そして市民を巻き込んだ国際スポーツ大会としては、この大阪大会が初めての大会でした。メディア史やスポーツ史においても、その歴史の中に埋もれているこの大会の時代とその特徴を振り返りました。

第17回セミナーでは、「育成年代におけるクラブチームの歴史一枚方ットボールクラブの歴史を振り返りながら」と題して、宮川淑人氏（関西クラブユースサッカー連盟会長・枚方フットボールクラブチアマン）にお話いただきました。枚方フットボールクラブの生い立ちから今を振り返ることで、日本クラブユースサッカー連盟が設立され、日本サッカーにクラブチームが発展してきた経緯を述べられました。今でこそ中学生、高校生年代はJクラブのアカデミーを中心にクラブチームが台頭していますが、50年前は公式戦出場の機会すら与えられない時代があったことを指摘されました。

第18回セミナーでは、「偶然か、必然か…『ノンフィクション作品が生まれる前の物語』」と題して、城島充氏（びわこ成蹊スポーツ大学教授・ノンフィクションライター）にお話いただきました。これまで城島氏が世に出した作品をその視点から振り返るとき、それぞれの作品をとりまくいろんな状況が複雑に重なり合っていて、もし、あのときあの人に、あの言葉に出会っていなければ、この作品を書くことはなかっただろうと、その偶然性について言及されました。また、作品が生まれる前に、すでに作者のなかで物語が生まれていると言います。城島氏が今抱いているそんな感覚を荻村伊智朗さんの生きざまを描いたご著書『ピンポンさん』というノンフィクション作品を通じて検証されました。

ご一読いただき、皆さんからの忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

<目次>

●第 16 回設立 2 周年記念オープン・セミナー・・・P.3～

テーマ：忘れられた『大阪オリンピック』～1923 年 メディア・イベントの誕生～

ナビゲーター：黒田 勇（理事・関西大学名誉教授）

コメンテーター：速水 徹（主席研究員・立命館大学客員教授／元朝日新聞論説委員）

日時：2022 年 5 月 19 日（木）20 時から 21 時 30 分まで

●第 17 回オープン・セミナー・・・P.17～

テーマ：育成年代におけるクラブチームの歴史一枚方フットボールクラブの歴史を振り返りながらー

ナビゲーター：宮川淑人（関西クラブユースサッカー連盟会長・枚方フットボールクラブチアマン）

コメンテーター：西山哲郎（理事・関西大学教授）

日時：2022 年 6 月 16 日（木）20 時から 21 時 30 分まで

●第 18 回オープン・セミナー・・・P.28～

テーマ：偶然か、必然か…『ノンフィクション作品が生まれる前の物語』

ナビゲーター：城島 充（びわこ成蹊スポーツ大学教授・ノンフィクションライター）

コメンテーター：黒田 勇（理事・関西大学名誉教授）

日時：2022 年 7 月 27 日（水）20 時から 21 時 30 分まで

《第16回セミナー》

忘れられた『大阪オリンピック』

—1923年 メディア・イベントの誕生—

黒田勇（理事・関西大学名誉教授）

はじめに

まず、本日の要点を先にお話しします。1923年第6回極東選手権競技大会（極東オリンピック）大阪大会。これは現代でいうメディア・イベントの様相を初めて呈したスポーツイベントとなりました。主要なアクターは、大阪毎日新聞と大日本体育協会、YMCAでした。日本とフィリピンと中華民国、この三カ国が争うスポーツイベントでした。このイベントについて、主に新聞メディアの立場からお話しします。

本日の主要登場人物

この大会に関わる主要登場人物はまずは5人です。

嘉納治五郎：大日本体育協会会長。

木下東作：大阪医専教授・大阪毎日新聞運動部長で、人見絹枝さんを見出した人。

西尾守一：大阪毎日新聞運動部記者で、私の評価では日本最初のスポーツ専門記者。

E.S.ブラウン：YMCA マニラ派遣宣教師で、極東大会を創立して運営する人。

F.S.ブラウン：YMCA 日本派遣宣教師で、日本でさまざまなスポーツを広めつつ極東大会の東京大会、大阪大会に尽力された人。同じブラウンという名前ですが、親戚関係ではありません。

ですから、今日はスポーツ団体、メディア、YMCAという三題嘶になるかと思います。た

だ、今日の大阪大会のお話の中では十分に説明する時間はありません。大阪大会に限定するともう2人のメディアスターが登場します。フィリピンのカタロン選手と秩父宮雍仁です。

左の写真は、1923年（大正12年）の大阪大会の写真です。このような感じで、大阪市内はなかなかの賑わいだと思います。マラソンの様子を写した写真、着物姿の子どもがポツンと写っていてなかなか面白いですね。



KEIO と書いてある左下の写真は、慶應義塾の野球部で、慶應の野球部が出場しています。また、右下の写真は市内のフィリピン選手団を迎えての賑わいで、当時の大阪市電等が写っています。



- 1905年 日露戦争終結
- **1910年 韓国併合条約**
- 1912年 ストックホルム五輪 日本初出場
- **1913年 第1回東洋オリンピック マニラ大会**
- 1914年 宝塚少女歌劇団結成
- **1914年6月 第一次世界大戦勃発**
- **1915年1月 対中国 21か条要求**
- 1915年8月 全国中等学校優勝野球大会
- **1917年10月 ロシア革命**
- 1918年8月 米騒動
- 1918年11月 第一次世界大戦終結
- 1918-1919年 スペイン風邪パンデミック
- 1922年2月 週刊誌創刊『旬刊朝日』『サンデー毎日』(4月)
- 1922年3月 「全国水平社」創立
- **1923年5月 第6回極東選手権競技大会大阪大会**
- 1923年9月 関東大震災

今日の話の背景 1910 年代から 20 年代

大きく言えば、表にありますように、日本の帝国主義の進展した時代、そして、それそれが関係していますが、生活の近代化（西洋化）、教育の普及、大衆文化の成立、マス・メディアの発達、このような時代のおはなしです。

1. 極東選手権競技大会（東洋オリンピック）の創始と日本の対応

さて、極東オリンピックであるとか、東洋オリンピック大会とかといろいろ呼ばっていました。これはフィリピンに本拠を置いた極東体育協会が主催し、アメリカ YMCA からフィリピンに派遣されたエルウッド・S・ブラウンが提唱したスポーツ大会です。

なぜ、大阪毎日新聞は熱心だったのかというと、これはいろんな前提や背景を話さないといけないのですが、今日は簡単に話します。日本におけるマラソンを「発明」したのは大阪毎日新聞でした。

大阪毎日新聞主導で、世界のオリンピックに出ようとしていたようです。それはなかなか

うまくいかなかったということで、あくまで仮説的ではありますけど、大阪毎日新聞は、その代わりにこの東洋オリンピックのプロモートに情熱を燃やしたのだと思います。

「東洋オリンピック」との出会い

その大阪毎日新聞が東洋オリンピックと出会うのですが、1913年大正2年1月2日の社告にこういう文章が出てきます。「東洋オリンピック大会と称する国際競技は来二月マニラで開かれるものを以つてその嚆矢とす。常に体育の奨励を以つて…」とこう書いています。

「私達、毎日新聞が選手を送るよ、これは大きな大会ですよ」という社告です。左の写真



のように2人の選手、愛知第一中の田舎片善次と、それから井上輝二、井上は大毎の記者でもありました。田舎片は、前年の初のクロスカントリーの優勝者です。井上はそこで二位となり、それが縁で大毎に入社しています。

極東競技大会（東洋オリンピック大会）とは

極東競技大会の研究はあまり多くはないのですが、ヒューパナーが『スポーツが作ったアジア』という本を出しています。この人の分析に従うと、アメリカのプロテスタント的男性観、人間観、そして文明観のもとでスポーツを通じてアジアを文明化する営みの過程として、一連の極東大会が組織され開催されることになる。言い換れば、YMCAに代表される米国の文化的ヘゲモニーがアジアのスポーツ文化に貫徹する過程だったのだというのが、ヒューパナーの分析です。

要は、キリスト教のプロテスタント的な男性が人間観で人間を鍛えていく。それは神の道なのだということです。アジアの人々も神の道へ行くべきだと、そういう信念のもとにスポーツをし、国際大会をしようとした。

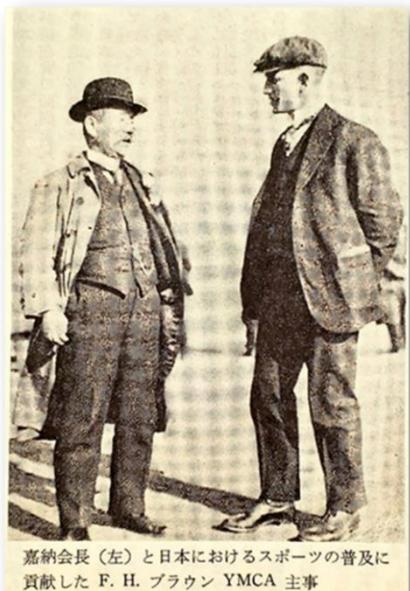
嘉納治五郎は全然乗り気じゃなかったようです。「オリンピック」の呼称はオリンピックだけに確保されるべき。既に日本は1910年に初めてストックホルム五輪大会に参加したので、いろんな地域限定の組織を新たに設立するという関心はない。日本の役割、オリンピック運動での日本の役割というのは非常に優越感を持っていた。それからアメリカ人によって作成された規則に基づいた大会を嫌がっていた等々です。YMCAの役割に対する疑問や、バレーボールやバスケットボールっていう団体競技への疑問も持っていたようです。（『日本体育協会史』1936年、他参照）

1917年第3回東京大会とYMCAの「関与」

今日は1923年の話なのですが、少しその前を振り返っておく必要があります。1915年の第2回上海大会は第一次世界大戦中です。日本が中国への利権を主張したことで中国の反発の中で開催され、なかなか大変だった大会です。日本は嘉納治五郎を含めてあまり出たくなかった。ところが大阪毎日新聞は当然熱心で、独自の選手も選んで、フランクリン・ブラウンも顧問として上海に同行しています。東京からも遅れて少人数の選手が参加しています。

第3回は第一次大戦が続く中、東京で開かれることになりました。芝浦の特設会場です。この大会の総務委員会は日本のYMCAを指導していたフランクリン・ブラウンの他、9人の日本人で構成していました。3回目にして初めて日本人の人才で大会運営ができたのだと日本側は評価しています。日本にとって初めての国際スポーツ大会がこの1917年大正6年の東京大会だったのです。

YMCAの「陰謀」



YMCAの「陰謀」と括弧にいれています。先ほどのヒューブナーも、「狡猾な戦略」というような言い方をしています。2人のブラウンが「これから日本の言うことも聞いて、日本にふさわしいようなルールを作るのでぜひ一度やってくれ」と嘉納治五郎を説得します。そして、何とか3回目を東京でやることになりました。

ただ一方でIOCのクーベルタンには、エリオット・ブラウンはちょっと残念なことを言っています。アジアの人間に任せておいたらこんな大会はできないんだ、白人がやるべきなんだ。ところが日本人というのは、フィリピン人や中国人のようにアメリカの監督を必要としているように見られるのを非常に不愉快に思う。だから、抜かりなくことを運んで「あなた方が頑張ってやってますよ」という具合にや

るんですよというようなことを、クーベルタンに言ったりをしています。今で言えば、人種差別的な発想ですが、当時はそういう意識が普通にあったのかもしれません。アメリカの宣教師たちは遅れたアジアを指導していくのだという意識も当然あったのだろうと思います。

第3回東京大会、1917年（大正6）年5月8日一急造の芝浦会場で開催

この大会が日本スポーツ界初の国際大会という意義はありますが、今日の話のメインはメディアがどのように表現したかということです。東京のどの新聞もそれなりの記述をし

ています。ただ、競技場内での競技の話に限定されていて、競技場外での人々の反応、東京市内の反応についての記事は本当にわずかしかありません。ですから初の国際競技大会とはいえ、競技場外の市民を巻き込むことはなかったといえると思います。

唯一の例外としてはオープン競技として日本人だけで実施した 25 マイル競争です。日本人はこの当時からマラソンが大好きなのです。コースは、京浜電鉄沿いの芝浦会場から鶴見の総持寺付近への折り返しです。この記事は結構大きくそして市民の様子も書かれています。先ほどの田舎片選手は愛知一中と言いましたが、愛知一中は今の愛知県立旭丘高校です。愛知一中の校長先生の日比野さんという方で、このときは代議士になっていて、代議士が参加したということで記事が書かれています。

「本年五二歳の日比野代議士が老軀を事ともせず疾走する様は、至る所盛んな喝采を浴びせかけられ居り」や「鉄砲玉ではない以上は必ず帰ってきますよ」などの談話が掲載されています。

イベントとしての広がりもここでは少しあるように感じられますが、それほど大きなものではなかったようです。

2. 東京大会(1917)から大阪大会(1923)へ

大阪における「日比オリンピック」

東京大会の 1 週間後、大阪において大阪毎日新聞は「日比オリンピック」として豊中グラウンドで陸上競技をやっています。また大阪朝日新聞は鳴尾運動場で日比「庭・野球戦」としてテニスと野球をやっているのです。

面白いことに一週間前の極東大会よりもこちらの記事の方が遥かに大きい。「東京大会だけの成績で俄かに断定すべきではない、今回のわが社の大会で初めてその真相を伺い知ることができる」と、両紙ともに前景気を煽っている。要は、当時の外国への出入口としての神戸港があります。フィリピンからの選手はマニラに帰るのに神戸港からですから、神戸までやってきて、そこで大阪で大会を開こうと、今度は完全に大阪毎日新聞と大阪朝日新聞の主導で大会を開くということで、こちらの記事の方が遥かに大きいということになります。

不思議なのは、中国選手団の動向ですね。先ほど言いましたように、このとき、中国とはもめていますので中国選手団はこのまま下関まで鉄道で行き、そこから上海へ帰っていました。

スタジアムと電鉄と新聞 朝毎の告知記事

朝日新聞と毎日新聞の社告なのですが、この大会の会場を告知しています。毎日新聞で「廿日豊中にて」。朝日新聞で「鳴尾運動場に於いて」。今の甲子園の少し海側にある競馬場の後に作った非常に大きなところです。

要は、スタジアムと電鉄と新聞というこの三位一体が出来上がるのがちょうどこの時代

だということです。今の阪急電車、当時は箕面電鉄と言っていましたが、今の言い方で言いますと阪急・毎日・豊中。それから阪神・朝日・鳴尾という関係でスポーツ事業が展開される。このきっかけになった大会だったわけです。

スポーツとメディアの密接な関係

この時代、大阪朝日新聞と大阪毎日新聞はともに、スポーツ事業を展開していくのですが、大阪毎日新聞の方が、かなり進んでやっていました。朝日新聞は遅れて始めるのですけれども、1915年（大正4年）からの全国中等学校優勝野球大会が大ヒットしていくわけです。

スポーツとメディアの発達 1917-1923年の変化

もう一つは、この時代、競技団体の組織化が進みます。これもやはり新聞社がイニシアチブをとっていく面もありました。サッカー協会が1921年。22年には日本庭球協会、おおよそ今から100年前に日本のスポーツ団体が組織されていきます。

各地の新聞もスポーツ大会を主催して新聞事業として進めています。この中で代表的なものとしては、読売新聞による京都一東京間の東海道の「駅伝」です。これが初の駅伝ですね。それから現在の「箱根駅伝」は1920年に「東京箱根間往復150マイル大学専門学校対抗駅伝競走」として報知新聞が始めます。この時代、朝日新聞と毎日新聞に限らず、新聞社が様々なスポーツイベントをやるようになります。

スポーツと活動写真

これもメディア史として非常に重要なと思います。最初に少し触れた日本における「初マラソン」、1909年の大阪毎日新聞による「阪神マラソン」が最初の活動写真による記録でしたが、1910年代にはスポーツとスポーツ大会を題材とした映画（活動写真）が広がっていきました。活字を読み、会場で出かけていく観戦方法の他に、映像としてそのスペクタクルを楽しむことがこの時期に生まれました。もちろん、極東競技大会も第二回の上海大会から撮影され、日本でも上映され、また東京大会も上映されました。ただ、これらはのちの五輪記録映画とは意図が異なり、記録により大会を振り返るというより「同時性」を求めたものでした。

前半の「まとめ」

1919年の第4回のマニラ大会、1921年の第5回大会上海大会といろいろありました。また、東京と大阪のひと悶着があった1919年のマニラ大会には、結局、大阪毎日新聞主導の「日本青年運動倶楽部」が主体となって、施主を



派遣しました。その後、日本体育協会の正統性を確認する、その代わりに大阪大会を開催していくよ、という感じでできたのが、この第6回大会です。大阪市立運動場を新築し、巨大なスタジアムで、ここで開催することになりました。

3. メディア・イベントとしての大阪大会

いよいよ開催 1923年5月21日

いよいよ第6回大阪大会が開催されます。新聞は、大会前から全面広告等々、大々的に報道します。これらの写真のなかで注目するのは、スタジアムが超満員ということです。非常に多くの市民が詰めかけたようです。

メディアによる意義付け 大阪朝日新聞の社説

大阪朝日新聞がこの大会に関する社説を書いています。簡単に言いますと、スポーツの取り組みについて、欧米との比較を強調して、「従来余りに冷淡、無頓着であったことに気が付いてきた」と。なんとなく大阪朝日新聞が毎日新聞に比べてスポーツ事業への取り組みが遅れていたことを言い訳しているような文章かもしれません。

大阪毎日新聞の社説

朝日新聞と比べて、主催は私たちではないけれど、基本的に私たちのものであると延々と書いています。最後の行がおもしろいですね。「その大大阪の精神を發揮して滋にこの大会を開くに至つたとは、収穫を楽しむ老婆の如きものがあると思う」。つまり、私たちが一生懸命頑張ったから、このような大きい大会が開かれるということを読者に訴えています。

大阪時事新報の参入

朝日と毎日はよく言われるのですが、東京の時事新報は福沢諭吉が作った会社で、その資本のもとにできた大阪時事新報も販売を拡大したいということで、この大会を機に女子スポーツに注目しています。オープン競技の女子庭球を後援し、優勝者に大阪時事新報杯を贈呈しています。この後に極東競技大会映画を制作し上映もしています。

学校体育と集団体操 そしてスペクタクル 大阪の児童・生徒を動員

木下東作は、直前の広報的講演会で、「比島と支那は競技の始められた目的が我が国と異なり、一方は政治的、一方は宗教的であるが、わが国は教育的であって、この大会以降は教育的でなくてはならぬ」と講演しています。要は、日本では、「スポーツは教育なのだ」ということを何回も確認しています。この大会もまさに教育的意義をもって大阪の児童・生徒を動員していく。

右の写真がそのスタジアムで行われた集団体操です。

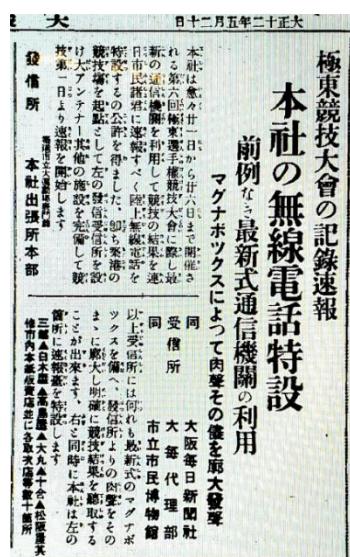
さきほど、少しふれたのですが、木下東作を中心に大阪の女学校の体操教師達が組織した勉強会から発展した「健母会」、「大日本青年運動俱楽部」というような、大阪には市民を巻き込んだ体育・スポーツ普及活動が盛んでした。一方でYMCAも関西で受け入れられていく。ただ、YMCAが唱えた神の道としての強靭な身体と、日本人が考えていた国民国家の強靭な身体をもった国民育成という二つの違う理念が表面的にはこの大会で同時に表現されつつ、実は融合することなく存在したというのもおもしろい現象だったと思います。



朝毎のニューメディア競争

さて、今日のテーマである「メディア・イベント」という概念に大きくかかわるものとして、「マグナボックス」という言葉が出てきます。いろいろなことをして大会を盛り上げますよという中に「最新式マグナボックス」とあります。

マグナボックスとは、要はラウドスピーカーなのです。蓄音機の音や音声を電気的に大きくする今では当たり前のスピーカーです。これができたのが20世紀の初頭です。1915年のクリスマスイブ、サンフラン



シスコの市民センターで、はじめてこういうスピーカーが用いられて、人の声が拡散されます。これが「マグナボックス」であり、当時のニューメディアだったわけです。この大会でこれが日本でも初めて用いられました。

大阪毎日の先行

大阪毎日新聞も同じように「マグナボックス」を導入しています。まさに朝毎の競争ですが、大阪毎日が先行しています。朝日の記事で「直通電話を以て時事刻々競技の状況を報告する」と書いています。毎日の方は「無線電話で無電発信所に」と書いており、つまり2年後に実現するラジオ放送の先取りが、この大きなイベントで行われたということです。

二人の「スター」登場 秩父宮とカタロン



さて、二人のスターがこの大会で登場しました。マス・メディアによってつくられたと言ってよいかもしれません。秩父宮とカタロンです。

左のような写真が残っています。当時、秩父宮と普通に笑顔で握手をするというのは、日本人ではできませんから、フィリピンのこの選手だったからできるのだと思うのですが。

秩父宮雍仁の動向

スポーツ皇室のはしりといわれたスポーツが大好きな方です。この人を大会総裁として初めて迎えた。皇室を正式にスポーツのイベントの総裁として初めて迎えた大会だったということです。新聞は秩父宮の動向をいろいろなところで書いていきます。どこどこへいらっしゃって、試合を熱心に観られたという記事をいっぱい書きます。ある意味、後々の国家のスポーツへの関与への最初の象徴的な出来事だったかもしれません。逆に言えば、この大会がある種の国家的権威を必要とした。大阪で開かれるということで、逆により皇室を使った国家的行事だという権威付けが必要だったのかもしれません。あくまでも仮説的ですが。

短距離の国際的スター、F・カタロン

100メートル、当時100ヤードですけど、世界的な記録を持っている人でした。いろいろな大会で何度も優勝を続けるという人です。このカタロンが日本選手よりもはるかにたくさん記事になります。「トラックの覇者、カタロンのスター」、「カタロン君の素晴らしい記録」ということで記事になって、一番の人気スターでした。

カタロンの話をしたのは、グリコの看板のモデルはカタロンだ、そうでないのだという議論があります。結局はグリコが否定したのですが、グリコも非常にいい加減で、「特定のモデルはいない」、「パリオリンピックに出場した谷三三五、マラソンの金栗四三ら当時の多くの選手をモデルにした」としているのですが、時代が違ったり、カタロンをマラソン選手したり、説明は全く間違っています。

いろいろ調べると、仮説的ではあるのですが、やはりカタロン中心のモデルだろうと思います。どうしてカタロンを否定するのか不思議です。大会当日の新聞広告のなかにもグリコの広告があります。初代のグリコのモデルです。後々、顔が怖すぎるから柔軟な顔に変えたという話があるのですけれども。こういう形で走っている姿はカタロンだったし、カタロンはこの前の大会から非常に有名な短距離の選手で、カタロンがモデルの中心にあったことは間違いないだろうと私は思っています。



市民の巻き込み

「灘萬北濱食堂の横に臨んだ三階露臺に特置した本社のラウド・スピーキング・テレホンは多大な歓迎をうけ」と書いています。大阪のライオン橋、難波橋の欄干にびっしり人がいて、この放送を聞いている写真で、マグナボックスというニューメディアへの好奇心と大会の関心が相まって、市民は大会に巻き込まれていく。

競技関係者だけでなく大阪市民も巻き込んでいったもう一つには、「YMCA

／YWCAの国を超えたネットワークと中国人ディアスボラの関係（コネ）が再び重要となつた。裕福なスポンサーから一時的に別荘の給与を受けた YWCA が女性競技者を世話した」（ヒューパナー）。この新聞記事（写真）がまさにそうです。要は当時の華族の人たちの別荘なり、宿舎なりに泊めてあげる。その交歓風景が新聞で取り上げられ記事になる。女性のアスリートが国際的に登場する初めての大会でもあったわけです。これについては後でもう一度触れます。

市民の盛り上がり

様々な新聞記事があるのですが、「会場は六日間を通じて満員の盛況であった」。「競技場前の民家の二階は臨時スタンドに早変わりして入場料を取る」という記事も掲載されています。

そのほか、「入場券が売り切れて手に入らないので困った熊本県から出張した小学校の先生が場内案内人夫に応じ無事人夫に化けて」と、本当かどうかわかりませんがそのような記録があります。「偽造、変造の切符まで飛び出す」。プレミアムチケットという言葉が当時もあって、「『プレミアムチケット』として学生による『ダフ屋』行為があった」。大会期間中に大阪の人が熱狂し、巻き込まれ、ビジネスをした。そういう大会だったようです。

女子スポーツ

女子スポーツがこの大会のもうひとつの大きな特徴です。あくまでオープン競技なのですけれども、バレー、テニス、バスケットボールが行われ、そのなかでもとくにテニスが人気でした。各紙も女子スポーツについて積極的に評価しています。「婦人の運動に対する愛好と興味は昨春以来急激に増加して、各種の競技会が各地に挙行され、我國夫人の運動に対する理解は益々深くなってきた」というようなことで、女性が積極的にスポーツをす



る、スポーツをする女性が評価されるひとつのきっかけになった大会かと思います。スペクタクルとしての女子スポーツと、私は仮説的に呼んでいます。スポーツビジネスとして女子選手が発見された大会とそういうふうに捉えています。

それも含めて、女性の解放、社会進出が叫ばれた時代です。こうした社会の意識がスポーツにも反映し、メディアも呼応し、またそれがより大きな社会に影響を与えていったのではないかでしょうか。

メディアによるスペクタクル化

今日の話の前の時代ですが、明治後期（1900—1910年頃）には、長距離走、相撲、早慶戦というのが、新聞によって取り上げられ、人気を博します。もちろん、試合経過、結果の報道中心でした。その後、大正期（1912—1925年頃）になると、競技場・球場が設営され、「大会」の開催が可能になります。会場外の「盛り上がり」も報道され、新聞読者も増大し、その読者がますます会場に詰めかけるということになります。さらに、活動写真による映像でそのスポーツが「可視化」されようになります。

今日は、最初の「メディア・イベント」という言葉を使いました。メディア・イベントの定義もいろいろあるのですが、ダヤーンとカツツの定義にしたがってメディア・イベントを簡単に言いますと、メディア外の団体が企画したイベントなのだけれども、メディアが媒介（主導）することで、現場の関係者以外の人が巻き込まれる。現場にいる観客以外の人も巻き込まれていく。その結果、一定の空間に「非日常」「祝典的」な空間と時間が成立する。そこでは、社会の統合的な価値が表現される。もちろん、彼らの研究は、テレビ時代を前提としたものですが、テレビ以前の活字と映画だけの時代ではあるものの、マス・メディアによって、大会の観客、選手、役員等、関係者以外の人たちも巻き込まれて、熱狂していくという初めての大会が1923年の大阪の極東大会だったという意味では、これが初の「メディア・イベント」あるいはその「嚆矢」ではなかったかと思います。

その大きな役割を果たしたのが、大阪毎日新聞と大阪朝日新聞で、この2つの新聞の販売競争がますますスペクタクルなものにしていったと考えています。

おわりに 極東競技大会のその後

極東大会は第10回まで行われます。これも、国際情勢のなかで、1934年の大会中に満州国参加を日本が要求して、憲章改正問題で中華民国側の委員が退場し、極東体育協会および

選手権大会はここで消滅します。

今日のまとめ的な話です。日本のメディア、毎日新聞も含めてなのですが、日本のメディアはオリンピックに関心を移していきます。より大きなスペクタクルが国際オリンピックにあるということで、極東大会は徐々に忘れられていきます。その転機となったのが 1928 年のアムステルダム大会です。織田幹雄の金メダルや人見絹枝の銀メダル等があって、オリンピックは読者を駆り立てるいいコンテンツだと気づく大会だったと思います。そこで、国際オリンピックのほうに焦点が移っていく。当時は大阪毎日新聞が主導し、大きなスポーツ大会は何でも「オリンピック」と呼んでいたのです。女子オリンピックとか、日本オリンピックとか、大阪毎日新聞は主催しています。逆にいえば商標権などがないで好きなようにやっていた時代だったということですね。もうひとつは国際スポーツ大会の派遣にストレートに国家は関わらない時代だったということも面白いですね。だから、新聞社がかなり自由にいろいろな形でスポーツ大会に関われたとも言えます。

さて、『東アジアにおけるスポーツとメディア』(黒田勇、森津千尋、水出幸輝編、創文企画、2022) の第一章「日本スポーツの東アジアとの出会い」というところで、今日の話も書いています。私の章はともかく、弟子の森津千尋、水出幸輝が非常におもしろい論文を書いております。ご一読いただければ幸いです。

注

本報告は口頭によるセミナーの採録のため、詳細の引用文献、参考文献の明示は省略している。掲載した写真は、『第六回極東選手権競技大會記念寫真帖』(時事新報社・大阪時事新報社篇十字館、1923 年)より転載。また、新聞記事は大会期間中の「大阪朝日新聞」「大阪毎日新聞」紙面からの転載である。

また、マグナボックスの写真については、福永健一氏より提供を受けた PDF 資料 "The Early History of Magnavox Co." p.55 からの転載である。

<速水 徹（主席研究員・立命館大学客員教授／元朝日新聞論説委員）のコメント>

黒田先生、大変興味深いお話をありがとうございました。私自身、朝日新聞社のオリンピック パラリンピック・スポーツ戦略室という部署で、社が主催あるいは共催、後援する 100 以上のスポーツ大会やスポーツイベントを事業として統括していた経験もありますので、新聞社におけるスポーツ事業の重みや意義については私なりに理解しているつもりです。ただ、大正の時代に大阪毎日と大阪朝日が、極東競技大会をめぐって、社を挙げて、ここまでしのぎを削っていたという事実は驚きました。社説の書きぶりなどは、もう力こぶが入りすぎで、今の論説委員室であれば即没、書き直しというトーンですが、そこまで両社とも力が入っていた、ということなのだと思います。

今回は、1923 年（大正 12 年）に大阪で開かれた極東競技大会がメディア・イベント的様相を呈することになった、という視点、販売競争的側面からのお話でしたが、朝日新聞社の

歴史を振り返ってみると、この極東競技大会の8年前、1915年から大阪の朝日新聞で夕刊を初めて発行しています。もともと大阪は発祥の地ですし、毎日さんとの競争で一步でも追いつきたい、という中で、一般の耳目を集めるイベントには積極的に関わり、編集と販売が手を結んで販売部数拡大に活用していこうという発想になったのは自然な流れであったと思います。

極東競技大会の前年、1922年には、皆さんもよくご存じである、日本の週刊誌の草分けとなった『週刊朝日』も創刊されており、極東競技大会開催の前後は、朝日新聞社として、社の事業規模拡大ということをかなり意識した時期だったのではないかと思います。ちなみに毎日さんもこの年に「サンデー毎日」を発刊しています。

私からは、販売部数のデータをお示ししての視点提供をさせていただきたいと思います。大正元年、1912年の時点に時間を戻しますと、大阪毎日の発行部数は約23万部でした。これが、極東競技大会があった1923年（大正12年）には92万部にまで膨れ上がっており、翌1924年、大正13年には111万部と、日本国内で初めて日刊新聞として100万部の大台に乗せています。こう見ると、大阪毎日さんにとって、極東競技大会があった1923年は、初の100万部の大台を目指せ、という意識が相当にあったと思うのです。

一方、朝日新聞社ですが、大阪毎日が23万部だった大正元年は19万部と、毎日の23万部に4万部の差をつけられています。今の夏の甲子園、全国中等学校優勝野球大会が始まった大正4年、1915年時点でも毎日が39万部、朝日は24万部と、15万部もの差にまで広がっています。そして極東競技大会があった1923年は、毎日が先ほど申しましたように92万部で、朝日は58万部と34万部の差、追いつくどころか差をどんどん空けられているわけですが、大正元年から大正の終わりの15年までのスパンで俯瞰してみてみると、部数はこの間に、大阪毎日が4.34倍、大阪朝日が4.1倍と、伸び率では肉薄しており、大正年間における両社のしのぎの削り合いが、まさに双方の部数増につながった、ということが見て取れると思います。急速な右肩上がりで部数が増えた大正という時代の中で、今回のお話の焦点である極東競技大会を見つめると、まさにメディア・スポーツの様相を呈した、というお話に合点がいく、と感じます。

あと、この極東競技大会が開かれた1923年という年は、日本のスポーツ報道の歴史にとってもひとつの重要な起点になった、というお話を私のほうからの情報提供としてさせていただきたいと思います。黒田先生が示された資料に「朝毎のニューメディア競争」と見出しを取ったページがありましたら、ここにある朝日の社告の左端に「アサヒ・スポーツ極東大会号」という柱があると思います。この「アサヒ・スポーツ」は、今は無きスポーツ専門雑誌で、1923年に創刊、創刊号が3月15日に出されました。極東競技大会の2か月前です。

朝日新聞社は1923年3月1日付で一面の社告を打ちました。そこにはこう書かれています。「運動雑誌界の権威 THE ASAHI SPORTS 創刊号3月15日発行 全部グラヴュア印刷」「内容は写真とニュースを本意とし、本邦運動界は勿論、全世界のものを網羅し、興

味に、体裁に、その他すべての方面に於いて在来に見ぬ新機軸を出し万全を期します」とあります。1部30銭で月2回の発行でした。

朝日新聞社には当時、現在のスポーツ部、朝日以外では運動部と呼んでいますが、部単位のスポーツ専門の部署はなく、大阪本社の社会部の中に社会部運動課という小さな部署を設けていたのですが、このアサヒ・スポーツ創刊を機に、社告が出た1923年3月1日付で大阪本社運動部として独立させ、部長、副長、部員2人の合計4人態勢で部をスタートさせるわけです。その時点で、今のようなスポーツ面という独立した面ではなく、アマチュアスポーツの記録などは社会面に載せるという時代で、運動部の実態としては、このアサヒ・スポーツの取材・執筆・編集が大きな仕事だったわけです。私自身、大阪本社のスポーツ部長を4年務めたこともあり、朝日のスポーツ部が大阪で産声を上げていた、という事実は不思議な感慨を持ちました。今から99年前のことです。

このアサヒ・スポーツの創刊号、1923年3月15日発刊の創刊号は、今日のお話にあった極東競技大会の特集記事に始まり、東京の大学野球の紹介、イギリスで開かれた競歩選手権の話題、大リーグのワールドシリーズに臨む前のベーブ・ルースや、ゴルフに興じる米国大統領の様子、あるいはハーダルの技術的な注意点を分解写真で解説するなど、相当にマニアック、かつ先進的なもので、スポーツ界の関係者には以後、なくてはならないバイブル的存在のスポーツ専門誌になっていくわけです。

アサヒ・スポーツはその後の日刊のスポーツ専門紙、日刊スポーツや報知新聞などの発刊のきっかけともなり、また戦後の廃刊後も、皆さんもよくご存じの雑誌「Number」の初代編集長がアサヒ・スポーツを参考にして創刊コンセプトを固めるなど、大きな影響力を残した雑誌でした。

1923年の社告には「アサヒ・スポーツ 極東競技大会号」を6月1日に発刊する、とあります。大会は5月26日の閉幕ですから、1週間と経たず、大会に特化したグラビア満載の特集号を出していたわけで、今で言うところのオリンピックのあのグラフ特集のような体裁で、まさに先駆けだったと思います。

以上のようなことで、1923年の極東競技大会は朝日新聞社に運動部、現スポーツ部というスポーツ専門の編集部門を作らせるきっかけとなり、またアサヒ・スポーツというスポーツ専門雑誌誕生とも関わりがあり、その後の日本のスポーツ報道を加速させるきっかけともなった、とみることができる、という視点をみなさまにお伝えしまして、私からのコメントを終わらせていただきます。

《第17回セミナー》

育成年代におけるクラブチームの歴史

—枚方フットボールクラブの歴史を振り返りながら—

宮川淑人（枚方フットボールクラブチアマン）

枚方フットボールクラブとは

・<枚方フットボールクラブ>



- ・スタッフ：28名（ガンバ大阪からの派遣スタッフ3名含）
- ・選手数：約300名（幼稚園児～高校生）、大人カテゴリー約100名
- ・カテゴリー：幼稚園児（チャオ）、小学生（ボンバーズ、ガンナーズ）、中学生（マシア）、高校生（カンテラ）、ユナイテッド（社会人トップ）、イルマオ（社会人セカンド）、スペリオール（保護者）、マスターズ（シニア）
- ・活動拠点：パナソニックアリーナ、香里ヶ丘中央公園、開成小学校、川越小学校、淀川スタジアム、いきいきランド交野
- ・入会資格：セレクションなし ユナイテッド、イルマオはクラブ在籍者およびスタッフ経験者のみ

約300名、大人のカテゴリーで約100名いて、あわせて400名ぐらいです。

カテゴリーは幼稚園児（チャオ）、小学生（ボンバーズ、ガンナーズ）、中学生（マシア）、高校生（カンテラ）、社会人トップ（ユナイテッド）、社会人セカンド（イルマオ）、保護者（スペリオール）、シニア（マスターズ）で構成されています。

活動拠点は、パナソニックアリーナ、近隣の小学校、河川敷のグラウンドなどです。入会はセレクションなしで、誰でも入れます。ただし、ユナイテッド、イルマオという社会人チームは、かつて枚方FCに在籍した選手しか入れません。なぜかといいますと、ユナイテッドは大阪の社会人1部にいるので、1部でプレーしたいからうちへ来るという選手がいて、いかがなものかということからです。クラブを愛してきた選手たちで行けるところまで行きたいなということです。これまで枚方FCに在籍していなくて外部から来ても「うちのスタッフとして子どもたちの指導しながらプレーするのであればOKですよ」というのですが、だいたいの人は指導したくなくて入会をあきらめます。



- ・<現職>
- ・関西クラブユースサッカー連盟会長
- ・関西サッカー協会2種委員
- ・<役員歴>
- ・日本クラブユースサッカー連盟理事
- ・日本クラブユースサッカー連盟登録管理委員長
- ・関西サッカー協会理事
- ・関西クラブユースサッカー連盟理事長
- ・大阪府サッカー協会2種副技術委員長
- ・大阪府国体少年男子チームコーチ

- ・<サッカー歴>
- 1972年 開成サッカースポーツ少年団入団
- 1979年 京都大学体育会サッカー部2ヶ月で退部
- 1979年 京都大学サッカー同好会『ルージュ』入部
- 1979年 学生コーチとして枚方FCに復帰
- 1982年 枚方フットボールクラブトップチーム設立
- 1983年 審判3級取得（～現在）
- 1985年 カネカ高砂サッカー部入部（～1987）
- 1988年 枚方フットボールクラブトップチーム復帰（～1991）
- 1988年 クラブ代表に就任
- 1991年 枚方フットボールクラブマスターズ設立
- 2010年頃 男組（シニアチーム）入部



クラブの基本方針



＜クラブの基本方針＞

クラブにかかわるすべての人。（=選手、家族、スタッフ、応援してくれる人）が幸せと感じるクラブを目指す

サッカーを通じて心身ともに豊かな大人に成長していく場でありたい

生涯サッカーを愛して関わっていけるような環境をつくりたい

・クラブにかかわる全ての人（=選手、家族、スタッフ、応援してくれる人）が幸せと感じるクラブを目指す。

プレーヤーズファーストという言葉がありますが、私は選手だけでなく、クラブに関わった全ての人が楽しく、サッカーを通じて幸せにな

ることを目指したいと思っています。

・サッカーを通じて心身ともに豊かな大人に成長していく場でありたい。

子どもから大人になる年齢の選手たちばかりですので、大人への階段を上っていくところを我々が少しずつサポートする。

・生涯サッカーを愛して関わっていけるような環境をつくりたい。

うちは決して強いチームではありません。強くなりたいと思っています。でも、サッカーを嫌いになって離れていくことがないように。必ずしも選手でなくても、大人になって自分の子どもがサッカーをするとか、サッカーを見に行くとか、いろいろな関わり方がある。そういう人がたくさん出るようにしたい。少なくともサッカーを嫌いになってうちのクラブを離れることがないようにしていきたいと思っています。

歴史 1969-1982

History 1969~1982

1969年 枚方市立開成小学校の課外クラブ、少年団として発足。

近江達先生が指導を開始。

1970年 開成サッカースポーツ少年団として正式の発足、活動開始。

1972年 香里ヶ丘サッカースポーツ少年団と改称。

1973年 枚方フットボールクラブと改称。中学生部門発足

1976年 高校生部門発足

1977年 ユースチームが第一回ユースリーグ（現日本クラブユースサッカー選手権(U-18)大会）優勝

1979年 卒業生がスタッフとして加わる体制開始

1982年 学生、社会人によるトップチーム発足（現ユナイテッド）



1969 年に開成小学校の課外活動クラブ、少年団の前の段階として、子どもを集めてサッカーを始めました。そのときの教えとしては、日本人は非常に器用なので、ブラジル人があんなにうまいのならば日本人はもっとうまくなるはずと、そういうことを実証したいという創設者の近江達先生の想いでした。翌年に開成サッカー少年団として誕生しました。開成小学校以外の子どもも増えてきて、1972 年に香里ヶ丘サッカースポーツ少年団になり、枚方市内からも子どもが集まってきて、枚方フットボールと改称しました。

1973 年に中学生部門発足し、私の年代が 1 期生でした。そして、我々が高校生になったときに自然と高校生部門ができました。このとき、実は公式戦というのではなくなかったのです。練習試合や招待試合等しかなかったのですが、我々はここでサッカーしたいという思いで高校生まで仲間といっしょに上がっていきました。ここで、連盟との歴史とも重なってくるのですけれども、いまの日本クラブユースサッカー選手権の大会の始まりとなるものが 1977 年に長野県で開催されたのです。これも公式戦とはいえないかもしれません、そういった思いのあるチームの人が集まって試合の場を作ってくれて、その交流戦がクラブユース大会の第 1 回となりました。このときに枚方 FC が優勝しました。

1979 年に卒業生がスタッフとして加わる体制ができます。この年までは、基本的には近江先生が指導されて、一部の教員の方がサポートし、人数の少ない指導者で多くの学校からの子どもたちを指導していました。私たちの年代が最初の卒業生なのでスタッフに加わり、そのあと、後輩たちも卒業したらコーチをするようになりました。そして、そのコーチをしている人たちがプレーできるチームを作って 1982 年に社会人チームとしてサッカー協会に登録します。

歴史 1985-現在

History 1985～現在

-
- 1985年 保護者チーム発足（当時HFC85）
 - 1988年 近江達先生勇退、宮川淑人が代表に就任
 - 1990年 レディースチーム発足
 - 1991年 トップチームOBチーム発足（現マスターズ）
 - 1994年 保護者有志による保護者会発足
 - 2004年 幼稚園児カテゴリー、チャオ発足
 - 2007年 保護者チーム、スペリオール発足
 - 2013年 ガンバ大阪からの指導者派遣開始
 - 2017年 ガンバ大阪とのパートナーシップ契約締結
 - 2021年 ユナイテッドのセカンドチーム、イルマオ発足



1985 年にクラブがだんだんと大きくなっていくなかで、保護者の人もサッカーしたいなということで保護者のチームが発足します。88 年に私が代表に就任します。90 年にレディ

ースチームを発足。後輩たちが多く入ってきたことから大人のチームを二つにわけて年長者はマスターズへ。そういうしているうちに応援してくれる有志の方々で保護者会を作つていただきました。

2004年までは、小学校の3年生からしかなく、幼稚園のカテゴリーはなかったのですが、幼稚園チームが発足します。保護者の人もチームとして活動したいということで、2007年に对外試合もする保護者チームのスペリオールが発足します。2013年からガンバ大阪から指導者派遣を派遣してもらっています。2017年からは、Jクラブと街クラブとで何かできないかということで、枚方FCからは観客動員をサポートするという形でパートナーシップ契約を結んでいます。2021年にユナイテッドのセカンドチーム、イルマオが発足しました。

日本クラブユースサッカー連盟の歴史

日本クラブユースサッカー連盟の歴史

- 栃木県那須、大阪府枚方市での有志による交流会を開催しクラブチームの活動の機運が高まる
1977年 長野県大町市で『第一回ユースリーグ』を開催。のちに日本クラブユースサッカー選手権（U-18）大会となる。（2022年・第46回大会開催）
1978年 読売クラブ、藤和不動産ユース、神戸FC、枚方FCが中心となって『全国サッカークラブユース連合』として発足。
公式戦の場がない選手のために競技会の場を作り、クラブチームの競技力向上と地域に根ざしたクラブの普及・発展を目指す有志の任意団体としてスタート。設立時はU-8年代を対象としていた。
1982年 日本サッカー協会後援大会となる
1985年 中学生年代を対象とした「日本クラブジュニアユースサッカー連盟」が発足。
1997年 6年間の一貫指導体制の確立を目指し統合され、日本クラブユースサッカー連盟となる
2011年 『一般財団法人日本クラブユースサッカー連盟』に発展。
2020年 女子U-18のカテゴリーも開始。



日本クラブユースサッカーの歴史のなかで知つておいていただきたいことだけをピックアップしました。もともと私たちが中学生や高校生のとき、公式戦はなかったのですが、クラブチームというものは存在しはじめていました。有志が集まって交流戦をして、いっしょにやりたいという機運が高まってきて、1977年に第1回当時ユースリーグという名称の大会を始めました。全国大会とはいえ、3チームが集まってリーグ戦をやり、枚方FCが優勝しました。この大会はのちに日本クラブユースサッカー選手権になり、今年で46回大会を数える大会になっています。

1978年には、読売クラブ、藤和不動産、神戸ユース、枚方ユースという4チームが中心になって「全国サッカークラブユース連合」が発足します。このときに、先輩たちが何を思つてこの組織を作つてくれたかというと、まず、公式戦がない選手のために、ちゃんとした

公式戦を作る。それによって競技力向上と地域に根差したクラブを作っていくこうということです。日本にはこれまでそういう概念がなかったのですが、クラブを作つて日本のサッカーを発展させていくこうという有志の集つた任意団体です。中学生は対象でなく高校生年代のみから始まっています。それ以降、交流戦に近い形がだんだんと大会形式になり、地域予選がはじまり、1982年に日本サッカー協会が認めてくれる後援大会になります。

1985年にやつと中学生年代を対象とした日本クラブジュニアユースサッカー連盟が発足します。もともと高校生年代と中学生年代とは別の組織で発起人も違つたのですが、6年間を一貫した体制を確立していくこうという思いで二つの組織を統合し1997年に日本クラブユースサッカー連盟となります。当時の連盟の加入資格には6年間指導体制があるチームであることが義務付けられておりましたが、6年間の指導体制を目指す、と緩和され最終的には今はその文言はありません。当初の思いは3年の繰り返しではなく、6年でやるという思いがありました。2011年に正式に法人化され一般財団法人日本クラブユースサッカー連盟になります。2020年に女子U18はコロナの中で始まり、これから活性化していくのではないかと思っています。

日本クラブユースサッカー連盟の歴史 U15の歴史

日本クラブユースサッカー連盟の歴史

U-15の歴史（U-15大会の生い立ち）

1980年 全国の強豪チームが集まる高浜カップ（愛知県高浜市）を開催

1985年 中学生年代を対象とした「日本クラブジュニアユースサッカー連盟」が発足。

1986年 高浜カップを吸収合併する形でクラブユースU-15選手権をスタート。（16チーム）



もともとU15のクラブチームの全国大会はなくて、カップ戦というプライベートな大会に強豪が集まるというのがありました。1980年、愛知県の高浜というところに全国から強豪が集まる高浜カップという大会がありました。U18と同じように連盟を作らないといけないという議論が高浜カップの機会になされ、そのメンバーたちがU18とは別に日本クラブジュニアユースサッカー連盟を立ち上げました。そこで、大会はどうするのだという話になったときに高浜カップをそのままやつたらいいということで、高浜カップを吸収合併する形で今のクラブユースU15選手権がスタートしました。当初1年は高浜カップという名前

のままで、次の年はプレ大会という名前で開催し、3年目に高浜カップという名前を消してクラブユース U15 選手権という名前に変わりました。高校生年代と中学生年代はスタート地点がこういうふうに違います。違ったスタートをしたのですが、90 年代くらいから一貫した指導できる体制を目指すというふうになりました。

U18 の変遷

U-18年代の変遷

- 1977年 長野県大町市で『第一回ユースリーグ』開始、公式戦の場ができる（春の地域予選）
- 1989年 全日本ユースU-18選手権開始。クラブチームと高体連チームが公式戦で対戦できるようになった。これが後のプリンスリーグに発展する。
- 1993年 リーグ開幕、リーグクラブのアカデミーが相次いでクラブユース連盟に加盟、Jユースカップ開始。（秋の地域予選が公式戦となる）
- 2003年 プリンスリーグ開幕。各地域で数年かけて府県リーグを整備し地域リーグを頂点とするピラミッドが形成され、クラブチームもレベルに応じたリーグ戦に参加
- 2017年 街クラブのみが参加するタウンクラブカップが開催
- 2020年 Jユースカップの街クラブ枠が廃止
- 2022年 Jユースカップ リーグとしてのチャンピオンを決めず地域のリーグ戦で完結する方式に変更



高校生年代の U18 がどう変わったのか。我々の時代にはなかったのですが 1977 年にクラブユースの公式戦ができた。全国大会の第 1 回ユース

リーグができることで、各地区で春の予選が始まり、これがクラブユースの公式戦に変わっていきます。

1989 年に全日本ユース U18 選手権というものがはじまります。ここでクラブチームと高体連が公式戦で対戦できるようになります。それまで、高校チームは高校選手権というものがあり、クラブユースはクラブユースの大会があり、公式戦で対戦する場面はありませんでした。クラブと高校チームが同じ土俵で対戦できる大会が生まれました。このときは街クラブしかなかったのですが、1993 年に Jリーグが開幕したことで、このころから、クラブチームのなかに Jリーグのアカデミーが加盟してきました。そして Jユースカップというができました。Jユースカップに街クラブは 4 チーム出場できます。その出場を巡って秋の地域予選が始まりました。各地域で予選を兼ねた公式戦が生まれてきました。

春の選手権予選、秋の Jユースカップ地域予選という 2 つの大きなクラブの大会として生まれてきました。このような大会と並行してプリンスリーグが 2003 年に開幕します。プリンスリーグが始まるまでは、それまではリーグ戦をやれということで、地域によってまちまちにリーグ戦をやっていました。苦労したと思いますが、それを淘汰しながら、今ではレベルに応じたリーグ戦ができています。

2017 年にクラブユースのなかで街クラブのみが参加するタウンクラブカップが始まりま

した。なぜ、できたかというと、プリンスリーグであっても、クラブユース選手権であっても、実態はJクラブのアカデミーがほとんどで、街クラブのモチベーションが保てないので、小さな山だけど日本一を目指せるということでできました。20年にJユースカップの街クラブ枠が廃止、22年にはJユースカップも地域チャンピオンを決める大会に変わりました。これは、昨年は、コロナで全国大会ができなかったというのもあります。

U15 年代の変遷

U-15年代の変遷

- 1980年 全国の強豪チームが集まる高浜カップ（愛知県高浜市）を開催
- 1985年 中学生年代を対象とした「日本クラブジュニアユースサッカー連盟」が発足。
- 1986年 高浜カップを吸収合併する形でクラブユースU-15選手権をスタート。（16チーム）
- 1989年 全日本ジュニアユース選手権開催。クラブ・中体連合わせた全国大会。
- 1983年 大阪府クラブユースリーグ開始。（大阪の例）その後このリーグ戦を母体として3種リーグがスタート。
- 1993年 リーグ開幕、Jクラブアカデミーが順次加盟。



U15 は高浜カップを母体にして吸収合併してクラブユース選手権が始まりました。中学生版のクラブと中体連をあわせた大会は 1989 年から始まりました。当初は、強い私学が勝っていた

のですが、Jリーグの組織のチームが今は上位を占めています。

リーグ戦の生い立ちについては、大阪の例ですが、1983 年からクラブチームだけの交流戦から始まり、だんだんリーグに整備されていきます。その後、このリーグ戦を母体として、3種リーグがスタートしていきます。このリーグ戦のなかに中体連のチームも入っておいでということです。93 年から Jリーグが開幕し、Jクラブアカデミーが順次加盟します。今、街クラブ、中体連、Jクラブアカデミーが全く同じ土俵のリーグ戦で戦っています。

文科省の方針・「地域スポーツ化」政策との親和性

こういうクラブユースの歴史を踏まえて、お題目をいただきました。今、中学校年代の部活動が地域に移管するということが提案されています。今日のお話で結論が出ることではありませんし、私はこういうように考えているということをお話します。

そもそも部活動の地域化というのは誰のためにやるのか、主人公不在の議論が行われているような気がします。教員の働き方のことなのか、生徒、保護者のことなのか、プロ指導者が潤うためにやるのか、それぞれの立場でライターの方が書くので、私はいつも論点が見えず疑問に思います。誰のためかというベクトルあわせをしたうえで議論をしないと、意味のない議論になると思います。我々もそうで、街クラブ側の指導者として教員の方と話をす

ると、話がかみ合わないので、焦点をあわせたうえで議論をしていくことが今後重要と思います。

スポーツであれ、習い事であれ、勉強であれ、私は受益者負担が原則だと思います。我々も含めてクラブチームは選手（親）がお金を出して、活動の費用を負担しています。学校というのは教員のボランティア指導によって、教員の時間を無料で提供してもらっています。「お金を払って」というと、「なんで」と言われたりします。部活動でお金をかからないものという認識を持たれている方が多いのではないかと思います。部活動であろうと、クラブであろうと、受益者は適正な費用を負担するべきだと思います。

サッカーだと「外部指導者を派遣してもらったほうがいい、専門的な指導を受けられるほうが子どものためですよ」といわれる。外部指導者に例えれば時給2000円を支払うというと、コンビニエンスストアで働くのと比べると高い金額のように見えますが、ひと月にしたらどうなりますか。生活できる収入にはならないと思います。仕組みとして外部に委託した指導者に、校内での仕事をあっせんするなど、指導者が生活できる仕組みをちゃんと考えていいないと成り立たないと思います。学校と民間が交流するきっかけになればと思います。

教員と外部委託の併用。どの地域でも同じように外部指導者を入れたらいいということではなく、地域によって事情が違うので、教員の方が今まで通り指導するケースもある。たとえば、教員の方は、水曜日は休みにして、外部指導者が担当するというふうにすれば、教員の休みがないということが解消されていく。教員の方がそのまま携わることができ、足りないところは外部指導者が指導するという方法もあるのではなかろうか。

海外のクラブと比較されることが多いですけれども、日本のクラブというのは学校を中心として展開できたら最高だと、かつてサッカーの指導者らと話をしたことがあります。グラウンドがあって、クラブハウスに使える教室、体育館があります。こういったものを有効に使わない手はない。上手に既存のインフラを使い、新にグラウンドを作る必要はないと思います。学校が外部に開放すればいいのではないかと思います。これまで学校とクラブは、なかなか融合してこなかったのですが、学校を拠点とした日本らしいクラブのモデルができるのではないかと思っています。

枚方 FC の未来予想図

100周年を迎えているときにどんなクラブであってほしいか。来年どうしようかというよりは、こんなクラブになるためにどう変えていくかということをいつも考えています。未来予想図の結論はまだ出ていませんが、願いとしては、クラブに関わる全員がサッカーを通じて幸せになって100周年を迎えてほしいなと思っています。

＜西山哲郎（理事・関西大学教授）のコメント＞

西山先生「枚方 FC のトレードマークはなぜ帆船なのでしょうか」

宮川さん「これは創設者の近江達先生が考えられたもので未知の海への航海という意味です。我々はパイオニアであると、それを未知の海への航海とおっしゃられた。最初はご本人の手書きだったのですが、デザイナーに描いてもらったのです」

西山先生「1973 年のかなり昔から少年団を解消されてフットボールクラブにされています。中学生部門、高校生部門を作るために少年団という名前を変えられたのではないかと思うのですが。少年団はもともと小中一貫として構想されていたのですが、あえてフットボールクラブと呼称されたのはなぜでしょうか」

宮川さん「近江先生はシャイな方で組織作ったりするのは苦手な方だったのですが、ライターの賀川浩さんは、設立当時の副会長で、クラブを作らないといけないとサポートしてくれました。賀川浩、大谷四郎さんが、ヨーロッパにあるようなクラブにしたほうがよいということで、小中一貫という感覚はなかったのですが、サッカーであって少年団ではないということでクラブという名前をつけていただいた。フットボールクラブという名前は当時としては珍しかったのではないかと思います。フットボールクラブという名前でアメフトか？言われたりもしました」

西山先生「枚方 FC は社会人 1 部も含めた総合的な FC として成長されたのですが、一方で J リーグが持っているユースクラブのシステムは、小学生年代はあちこちでユースチームを持っているけれど、中学生・高校生になるとだんだん絞っていくのが一般的なクラブだと思います。形式的には小中高一貫なのですが、同じ子が必ず高校までサッカーできる状態ではなくて、だんだんと絞り込まれていくと思います。枚方 FC は小中高一貫の体制というのは、どのように運用されているのでしょうか」

宮川さん「小学生年代は 1 学年 30 人弱、中学生は 1 学年 30-40 人、小学生から中学へ進学する際に半分くらいが昇格し、半分くらい外部から入部します。セレクションしません。うちでやりたいと思うか、部活でやりたいと思うか、他のスポーツをやりたいと思うかは子どもたちの選択です。B チームの子だから上がれないというのではなく、友達関係のなかで上がってきたている子もいます」

西山先生「他の J クラブの下部組織とは違っているという印象、理解でよろしいでしょうか」

宮川さん「想いが違います。J クラブは幼少期には広く、ほとんどはスクール展開しながら、

その中からセレクションをしてトップになるための選手を絞っていきます。基本的に違います」

西山先生「同時期に発足した東京ヴェルディ（当時は読売クラブ）はJ型のクラブになっていますが、枚方FC以外にも、ドイツ型というか地域クラブとしてのFCは他にもありますか」

宮川さん「あまりないです。クラブユース連盟U18で参加しているのが、全国で120から130チームです。Jクラブのアカデミーが50チーム程度で街クラブのユースが60-70チームくらい。その街クラブはどんな構成をしているのかというと、多いのがJFLやそれを目指すようなクラブチームの下部組織です。1種から3種、大人から高校生、中学生、小学生とつながっているチームは日本で20チーム以下と思う。20チームのなかでも社会人チームが強いのでよそから集まっているだけで、すべての年代がつながっているチームは全国で10チームもないのではないかという気がします」

西山先生「理想的なことを非常に早い段階から続けていらっしゃる」

西山先生「学校部活動の地域移行の話のなかで、学校や地方自治体から協力してほしいと言われたことがありますか」

宮川さん「言われたことはないです」

西山先生「女子サッカーについてですが、学校の部活動のなかに女子サッカーがなくて、堺市ですと学校運動部のなかに女子サッカーを作るということで、複数の中学校で集まって女子部を作っています。枚方FC女子部は自治体から頼まれたわけではないけれども地域の女子サッカーの受け皿も担ってこられたのかなと思いますが」

宮川さん「うちのなかで女子部を作るという発想はなかったのです。学年ごとに女子が1人、2人いる。女子のことに関しては正直できていません」

西山先生

「サッカーというのは学校部活動とユースとの融合が比較的うまくいっていると認識されていて、他の競技と比べるとうまくいっているのは間違いない、代表やJクラスの選手を育成するという点では比較的うまくいっているのですが、生涯スポーツとして楽しむスタート地点として小中高のクラブがあって欲しいなというのがあります。宮川さんのお話では、日本の現状では、部活動もがんばって競技で優勝する、勝ち上がることが中心になっている。

一方で、ユースのほうもJリーグが90年代から人気を高めてきたおかげで、そのせいでといつたら申し訳ないですけど、生涯スポーツとしてのサッカーというものを見直さなければいけないのではないかと思います。宮川さんのお話で、みなさんに見直していただく機会をいただけたかなと思います」

《第18回セミナー》

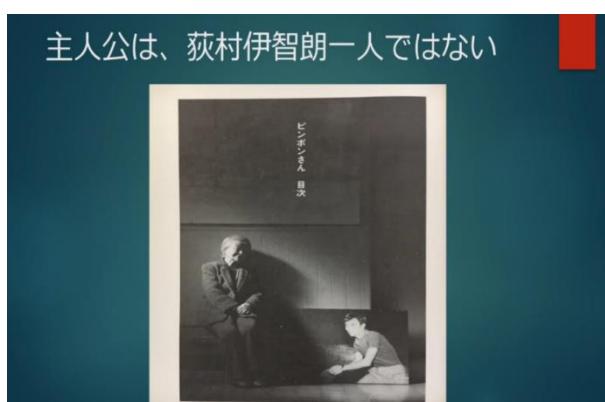
偶然か、必然か…『ノンフィクション作品が生まれる前の物語』

城島 充（びわこ成蹊スポーツ大学教授・ノンフィクションライター）

はじめに

僕がいろいろな作品を書いていく時に、このタイトルにある偶然か必然かというのがずっと心の底にあって、常にその視点を持って、対象の人だったり、シーンであったりを見るようにしています。今日のテーマとなる作品のタイトルは『ピンポンさん』で、講談社から単行本が出ました。この主人公の荻村伊智朗さんという人は戦後のスポーツヒーローで、世界選手権のタイトルを12個取って、その後、海外に指導者として行き、いろいろな見聞を広めていきました。最終的に国際卓球連盟の会長としてピンポン外交をしたり、統一コリアチームを作ったり、日本のスポーツマンとしては珍しく、海外でも勝ち、引退後も海外でも活躍された稀有な人です。

主人公は荻村伊智朗一人ではない。



物語の主人公は荻村さん1人ではありません。この目次にある写真は荻村さんの現役時代であり、この向かって左側に座ってらっしゃる女性が上原久枝さんです。この写真の場所は武蔵野卓球場で、戦後まもない昭和25年9月に吉祥寺でオープンされて、そこにまだ高校生だった荻村伊智朗が訪ねてきて以降、荻村の卓球人生をこのおばさん、僕らは「おばさん」と言っているのですが、上原久枝さんが支えていきます。大きく言えばそれがピンポンさんの物語の流れ、軸になります。

荻村伊智朗に“出会う”までの糸余曲折

僕がこの荻村伊智朗さんと出会うまでにちょっと曲折を経てしまうのですけど、偶然か、必然かというと、不思議です。僕は産経新聞の大阪社会部に行って、社会部では大阪府警回り、事件記者としてはエリートコースを歩み出すのですが、二課を担当した時に、その当時の二課のキャップの人と衝突します。辞表を書いたのですが、幹部に引き留められて大阪市役所担当になります。

その時ちょうど大阪市は2008年の大阪オリンピック招致を目指して、活動していた時でした。僕自身は挫折感でいっぱいだったのですが、そこで、大阪のミスター・オリンピックと

言われた高井眞行招致推進部長に出会います。この人は、叩き上げの人で僕と同じ関西大学出身です。最初は水道局の検針係から始まってすごい行動力で、公務員の方と何か逆の性格で、いろいろな組合交渉や解放同盟との交渉とか、タフなのです。そういう形で、大阪市のスポーツ行政のトップまで上り詰めた人とここで出会います。

この人がちょっと変わった人で、僕の原稿を何回か見て、会うたびに「お前、すぐ辞めてフリーの作家になれ」と褒めてくれるのです。秘書の方からナンバーの新人賞の前年の受賞作のコピーを渡されて、それを読んで部長の部屋へ行くと「もうこれぐらい左手の小指の先で書けるやろ」と。新聞記事しか書いてない僕にはちょっと、というような話をしている中で、高井部長が荻村メモというのを教えてくれるのですね。

大阪五輪招致と荻村伊智朗

大阪オリンピック招致の基本理念に、荻村伊智朗さんがすごく密接に関わっていというのを高井さんによって知らされました。大阪は、オリンピック招致に対するノウハウが全く誰にもなかった状態でした。当時の西尾市長が、もう荻村さんは末期がんで、救急車で移動みたいな時に会ったのらしいのですが、何とか大阪に来てもらって、大阪オリンピックの招致コンセプトはどういうふうに考えたらいいのでしょうかというのを荻村さんに問うたらしいのです。荻村さんもお話できる状態ではなかったみたいでほんの数分です。荻村さんは「もう政治的なスローガンや理念を掲げる時代ではないのです。大阪という街に、世界中のアスリートが集まれば、最高の環境で世界最高レベルのスポーツを表現できる。そのことを招致スローガンにして世界に訴えた方がいい」と。それをスポーツパラダイス構想というふうに荻村さんは言いました。

荻村さんは会った人を魅了する人で、西尾市長は荻村伊智朗という人に一目ぼれし、このスポーツパラダイス構想をもっと大きく広げて、街作りの柱にしました。僕は市役所担当だったのでスポーツパラダイス構想は知っていましたが、その原点というかルーツが荻村伊智朗さんという卓球界ですごく活躍した人だと、その時に初めて知るわけです。

産経新聞夕刊で『ミスター卓球の遺言』執筆

高井部長から他界された荻村の思いを書いて欲しいということで、産経新聞の夕刊で『ミスター卓球の遺言』で荻村さんの足跡をたどる取材を始めました。荻村さんの奥様の時美さんにいろいろお話を聞いた時に、「せっかく大阪から東京まで來たので荻村が一番お世話になった卓球場のおばさんに会ってきました」と。ここで初めておばさんの存在を知るわけです。

時美さんが、武蔵野卓球場の固定電話に電話してくださって、たまたまおばさんがいらっしゃった。もし、買い物とかで出られたら僕は多分一生会わないままだったのですが、そこで、おばさんが電話に出てくれて、今、三鷹にいるからすぐ吉祥寺で会おうということで、近鉄百貨店で待ち合わせし、そのまま食堂フロアに4時間あまり。最初に会った時から、めちゃくちゃ小さくてチャーミングな女性という印象と、声がなんとも言えない、優しいとい

う表現でも違うのですが。初めて会ったのですが、距離が自己紹介した瞬間から縮まって食堂フロアのお店に入った時にはもう何回目でしたっけ、みたいな。

『地球の中の別世界』

その時に、昭和 25 年の戦後間もない頃に誕生した武蔵野卓球場が開場 40 周年を迎えた時に作られた記念誌「地球の中の別世界」という本を見せてもらい、こんなのがあるのですねと言いながら、卓球場の経緯を聞いていました。例えば卓球場に対するいろんな人の思いが綴ってあるのです。これは久保さんで、荻村さんと同じ年ぐらいの一番の古くからのご友人でタマスという卓球ブランドでラバー開発などに後に活躍される方で、この人は武蔵野卓球場についてこういうふうな文章を書いてらっしゃったのですね。

武蔵野卓球場についてなら、八〇〇枚は書ける。うそじゃない。なぜなら、われわれの青春はそれ以外になかったのだから。(略)

われわれファーストジェネレーションは、卓球の魔性と、おばさんへの憧憬と一体どちらに取り憑かれていたのだろうか。しかし、おばさんの白魚のような指は、いつも荒れ傷ついていた。われわれ、少なくとも十数人の、汗にまみれたユニフォームを、いつも手で洗っていたのだ。若き日のおばさんを知らない、遅れてきた人達に私はまったく同情する。ざまあみやがれ。

鮮烈な、少年荻村伊智朗。ラリーを続けながら除夜の鐘を聞くならわし。幾度か電車を乗り継いで、やっと辿り着く廃墟のような城北体育館。おばさんはいつも一緒だった。何度負けても風は輝いていた。

おばさんはローレライの歌と酢豚が上手だった。食べ物の乏しい時代。おばさんの酢豚を食べて、世の中にこんな旨い物があったのかと心底驚き、感動した。今や伝説の狭霧に閉ざされようとする武蔵野卓球場。あの時の身を灼く狂気は何だったのか。(久保彰太郎)

ITS 三鷹を主催されている織部幸治さんという方で世代的には荻村さんよりも少し新しくなります。こういう文章です。

おばさんがこちらを窓の向こうから見ている。しかし、ミスばかりしてどうにもならない。その後必死になると良いプレーが出来るが、その時にはおばさんはもう見ていない。こんなくやしいことは他にない。本当に時々、ばか調子の時があり、誰とやっても勝ってしまうが、大体こういう時はおばさんは用事をしていて窓の向こう側にはいない。(略) この調子を明日にとおけないものかと思った。案の定、次の日は全然駄目で、悔しくて泣きながら善福寺を走った。

上原さんのところで自分の好きな卓球を好きなだけやることが出来た。卓球を愛している人々にそこで出会った。自然で大きなやさしい心ときびしい心にふれた。僕は武蔵野卓球

場で学んだ。

武蔵野卓球場は今でも、地球の中の別世界だと思う。(織部幸治)

この織部さんはコピーライティングのセンスをお持ちで、荻村さんが 94 年 12 月 4 日に 62 歳で亡くなられ、その荻村さんを追悼する会を、荻村伊智朗と上原久枝さんの久で、智久会という名前にして考えられました。

この話を聞いて僕はちょっとびっくりしたのですね。日本だけではなく海外でも名を馳せた人を追悼する会におばさんの久枝さんの久の字を入れるというのは、どんな世界があるのだろうと。物語がどこから始まったかを書くというのは、おばさんとのこの食堂での 4 時間の出会いのなかで生まれました。

そして、『地球の中の別世界』に、荻村伊智朗がおばさんのために詩を書くという話があって、初めて聞いた時からもうちょっと原稿にしていたのです。もう帰りの新幹線で原稿にするようなシーンでした。4 時間の間におばさんはこの『地球の中の別世界』をベースに、かなり当時の記憶を克明にしてくださいました。

武蔵野卓球場の 40 周年にいろいろ思い出のある卓球人が文章を寄せたのです。荻村さんも「武蔵野卓球場あれこれ」というタイトルで自分の思い出を語ったのですが、おばさんには詩を書く約束をしたのです。でもなかなか届かない。「忙しいのはわかるけど早くしてくれないと間に合わない」と。当時、荻村さんは国際卓球連盟の会長になられたばかりで、ヨーロッパ発祥のスポーツの国際連盟のトップをアジア人がやることも初めてで、そういう多忙を極めていた荻村さんがどうしても詩を書かせてくれって言っていて、なかなか間に合わない。ごめんね、おばさんと言いながら、どれだけ頭をひねっても最初の 3 行しか浮かんでこない。僕はおばさんからこの話を聞きながら、どんな詩だったのだろうと。

『武蔵野卓球場贊歌』

荻村伊智朗

天界からこの蒼い惑星の
いちばんあたたかく緑なる点を探すと
武蔵野卓球場がみつかるかもしれない

先ほど、杉本先生があふれる感性と言ってくださったので、そこに強引に繋げると、この 3 行を、これを書かれた対象のおばさんが目の前にいるので、あれ何これって、荻原がこういう詩を書くということにまずびっくりしたのと、書かれた人って何? みたいな。世界の荻村が、こういう形の詩を書く対象の人が目の前にいる。僕の好奇心に火がついたというか、すごい物語の一端に触れてしまったのではないかという感覚はこの 3 行がありました。

ちなみにこの『武蔵野卓球場贊歌』からどう続くかというと、

40 年もたつと

上原おじさんがピカピカに磨いていた自転車もどこかへ行ってしまったし

齋藤敏雄くんや内田がお尻をぶつけた
ぼくたち手塗りの濃緑の腰板も
色がすこしあせたかもしれない
それなのになぜ
若い人たちがつぎつぎと集まるのか
めじりの小じわもごましおも
どんどん集まるのか
あのしなやかな膝にやさしい
桧の床板が抜けてしまうかもしれないのに
それはもちろんあの人のせいさ
若者がつい
未来の夢を語って聞かせたくなるような
めじりとごましおがつい
ぐちの一つもこぼして安心の気分のような
あの人がいるせいさ
だれもみたことがない
若い頃のあの人に向って語るのか
そこにいるチャーミングなおばさんに向って語るのか
不思議な武蔵野のローレライ
あの人のいるところは
武蔵野卓球場といいます
これからもそういいます
みなさんもセフィーロのせんでんのよう
「お元気ですかア」とお寄りください
新しい夢がいっぱい語れます。

どういうことなのだ。目の前のおばさんがどういう人なんだと思って。おばさんの説明がすごく丁寧でディテールに富んでいるので、もうすぐに原稿ができてしまうのです。オリンピック推進部長の高井さんが言わされたように、ナンバーに作品を書きました。荻村さんの詩のフレーズを丸パクリして、武蔵野のローレライという作品を書きます。これで80枚ぐらいでしょうか。この時は、おばさんには、まだ、2回か3回、お会いしたかどうかで、あとはもっぱら電話取材でおばさんに話を聞きした。それと、荻村さんを追悼する会に1回だけ出るチャンスがこの間にあったのです。その時に出会った人たちからいろいろな話を聞いて書きました。これはおばさんが高島屋という百貨店の化粧品売り場で働いていた時の写真を使いながら、ナンバーの新人賞をいただきました。



ノが違うと思った」と書いてくださったのです。これは飯の種にはならなかったのですけど、フリーになってから、銀行の預金口座がもう残高 60 円になった時に、これやばいなと思った時に、この後藤さんの選評を引っ張り出してきた。この一言で助かったのであって今日はパワーポイントに 1 枚入れました。言葉の力ってやっぱり侮れなくて、挫折しそうなった時に、さすがにまずいとなった時に、心の支えになってくれました。

新聞記者からフリーランスのノンフィクション作家へ

この賞をきっかけに僕がフリーになり、ノンフィクション作家の道を目指していくのですけれども、新聞記者の時は、特ダネ至上主義というか、どんなネタを紙面に載せるのか、何を書くのか、ネタを探すみたいなものが主だったのです。しかし、フリーになると、どんなテーマを、どんな手法で書くかっていう書き方の問題です。新聞記事は手法といつても、そんなにいく通りものパターンがあるわけではなくて、限られてきます。ノンフィクションは、手法は様々でそのテーマをどんな手法で書くかという、新聞記者の時はあまりなかった視点で物事を見るようになりました。独自の視点、感受性です。こういうものをやっぱり意識するようになりました。最初に書き下ろした長編ノンフィクションが『拳の漂流』です。こういうものを一冊、書いているうちに、物語を作っていく側の視点というかそういうものが生まれてきます。

初めての書きおろしノンフィクション『拳の漂流』

戦前に来日したフィリピン人ボクサーのベビー・ゴステロが、戦争が始まって帰れなくなって、その後もずっと孤独のまま日本の大阪のミナミに残って、最後にミナミで亡くなります。僕はそのベビーさんが亡くなる直前に会って、最後を看取るのです。身寄りが日本にはいなかつたので、フィリピンに遺骨を持っていってベビーさんの遺族を探します。どう書くかっていうテーマでいくと、これは私フィクションという書き方で、私自身が作品の中の登場人物になってストーリーを展開していきます。

『武蔵野のローレライ』を長編ノンフィクションに

でも『ピンポンさん』に関しては、これは違うなと、私は出さないでおこうと。荻村さん

この時は本当にまだ物語の入り口と
いうか、最初の4時間あまりの近鉄百
貨店でのおばさんの印象、『地球の中の
別世界』の印象をベースにして、そこ
に少し肉付けしたくらいの感じでした。

自分でいうのは恥ずかしいですが、選考委員の後藤正治さんという有名な作家の先生が「書き出しからこれはモ

が残した言葉、関連記事を徹底的に取材しようと。当時、講談社もお金があったのか、中国のスーパースター莊則棟という荻村さんの晩年のライバルというか、世代交代的な感じになったその人にも上海でインタビューさせてくれました。でも、やっぱり物語の軸は、荻村さんの言葉の力とおばさんの献身。僕が最初に惹かれたおばさんの献身、武蔵野のローレライの原型は崩せないと思いながら、さらに取材を進めていきました。

日記『時・時の記』

その中でも重要だったのが、最初に書いている言葉の力なのです。荻村さんのご遺族の了解を得て荻村さんの部屋を訪れました。部屋に入らせていただいた時に、机の上が、本当に昨日までそこで生活していたかのような感じで残っていました。オメガの腕時計がポンと置いてありました。「引き出しも開けてもいいですよ」と言われたので開けると、一番上にこのタイトルに書いてある「時・時の記」という高校時代にその時々の思いをつづった日記帳が出てきたのです。日記帳といつても大学ノートで、その表紙に「時・時の記」と書いてありました。過去に資料として収集した荻村伊智朗の著作物でも、自分の日記のことを触れていらっしゃるので、僕は言葉としては知っているものが多かったのです。けれども、直筆のこの日記を見て、まさにモチベーションじゃないんですけど、この言葉をどういうふうなシチュエーションでどういうふうに物語の中に組み込んで伝えるべきかと、かなりかなり考えるようになりました。

俺が死ぬ時、なんと思うだろう。

それを思う時、一刻も無駄な真似はできない。

誰にも影響されるな。

(荻村さんの日記より)

これは本当に書き殴ってありました。荻村さんはお父さんもおじいさんも肺の病気で、32歳で亡くなっているのです。まして多感な時に戦争を経験しているので常に自分の命というものがいずれ終わるというか、ひょっとしたら親父とおじいちゃんと同じ32歳でという、何か、命の期限に追われているような、常にその意識が見えてくるのですね。この時、本当に全く無名で卓球部に入ったばかりの高校生なのです。

才能で勝てなければ、タフネスを以って勝つのだ。

同じ手段でラチがあかなかつたら、

違う手段でラチをあかすのだ。

一日をおろそかにするべきではない。

毎日を死ぬ気でやるのだ。

磨き方にはコツがある。
一気にのぼりつめるのだ。
途中で息を抜いたらダメだ。
一気とは、十七、十八歳から三年間だ。
たったの千日、
一日も気を抜かずに
集中できればいい。
(荻村さんの日記より)

言葉として書ける人はいると思うのですけど、当時の荻村さんは本当にやったのです。荻村さんは高校の卓球部の練習が終わった後、当時、都内にいくつかあった卓球場で強い大学生が練習していると聞けば、道場破りではないんですけど腕試し。強い相手を求めていろんな卓球場を転戦して、最後に、おばさんがいる武蔵野卓球場に戻ってくるというふうな生活をしていました。おばさんの目の前でもう極端に言えば、気を失うまでラケットを振るっていうか、この日が最後ではないかと思うぐらいラケット振り続けた。

こういう言葉に出会った時に、僕はおばさんに連絡をして「こういうことが書いてあったんだけど、なんか、思い当たることありますか」とか、「おばさんの記憶の中で符号するとか、そういうことってありましたか」とか。おばさんとの関係も取材を超えて何か日常的に会話をしていたので、常に荻村さんのことをおばさんに、こういうことがあったみたいだけど、おばさんどうしていましたかと、常におばさんの視点をそこに置くように、そういう取材の形式で物語を作っていました。

荻村さんと一番親しかった久保さんに荻村さんはこんなこと言ったらしいです。「僕だつていろんな人に、恋人に接するように優しく接したいと思う。でも、できないんだ」。

当時の荻村さんは、卓球が強くなるためだったらもう友達なんかいらない。孤独でもいい、でも卓球は強くなりたい。おばさんが『地球の中の別世界』で「鮮烈な」という表現で書いていらっしゃいましたけど、もう本当に強烈だったらしいです。卓球している時はとにかく人を寄せつけないような、まだ無名だった荻村さんがそういうオーラを放っていた。その荻村さんが唯一、心を開くというか、近づけられたのが上原久枝さんだったのですね。これも僕の作品からで、出会って間もない頃、3週間ぐらい経った時のシーンです。

「どうしてあなた、いつもそんなに遅くにうちに来るの。おうちの方が心配なさらないから」と聞くと、荻村さんは「いえ、僕の母は仕事をしていて帰りが遅いんです」。お母さんは、母子家庭でずっと仕事遅くまでしていて、帰りが遅い。お父さんは32歳で荻村さんが3歳の時くらいに亡くなっていていない。お母さんはもう仕事で疲れて帰ってきて、晩御飯はとても作れない。

「それなら、うちで食べていったらしいじゃない」

「いいの、おばさん？」無愛想な少年が初めて弾んだ声を出した。
おばさんと呼んだのはこの時初めてだったと。

ちょっとびっくりするのはこれ以降です。人と出会って飯を食っていけというシーンは日常的にあり、こういう日はあるでしょう。荻村さんとおばさんの関係がすごいのは、これが毎日続いたことです。もちろん世界選手権に行ったり、東京を離れたりしている時は、なかつたらしいです。しかし、東京にいる時はどんなに遅くなっても必ず荻村さんがおばさんのところに寄った。なんかすごい。まだ無名の荻村さんが上原久枝さんとそういう縊で結ばれていた。もうこれで物語の軸ができているのです。

これはいやらしい言い方ですが、僕らは現実しか追えないのですけれども、その現実が少しぶれたり揺れたり、挫折ではないけれども、曲折を経たりすると、リアルな物語がドラマチックというか、

物書き的な視点で申し訳ないのですけれども、物語に奥行きができるというか。そういう感覚になるのです。荻村さんの日記を見ていると、プライバシーで本当に申し訳ないと思いながらもノンフィクションの葛藤ですけれども、例えば、荻村さんがおばさんとの葛藤を抱えているところも見つけていくのです。だんだん荻村さんが自分を孤高の天才っていうふうに重ねつつある頃ですけども。

天才には彼の良き理解者、心の援助者が必要だといった様な事をルーチンが言う。

天才を理解できるモノが居るか

そいつも天才か

※ツルゲーネフの小説『ルーチン』の主人公に重ねた感情

(荻村さんの日記より)

こういうことを書いているのですね。これがおばさんことを言っているかどうかは、これだけ見たらはっきりわからないのですけれども、でも、おばさんことを言っている記述があります。

親はやはり一人居ればそれで充分なものか。

あまり欲張ると、とんでもない事になる。

卓球場を追い出されなければ幸福と思はう。

小母さんが自分を理解してくれるだなんて思うのは

間違っている。小母さんは矢張り他人である。

他人の飯を喰えとはよく言ったものだ。

悔しかったら、泣かう。それでいいんだ。

(荻村さんの日記より)

おばさんに対してかなり激しい感情。僕はこの時のことをおばさんに聞いたのですが、あまりはっきりと記憶していないのか言えなかつたのかよくわかりませんけれども、何か周りとの人間関係のトラブルに対しておばさんが何かを言ったのか、それともおばさんと直接的な何かがあつたのかはわからないままなんですけれども。

この後さらに、

悔しかつたら、泣かう。それでいいんだ。

さらに

小母さんに泣かれて妥協した。俺も少々涙が出た。

(荻村さんの日記より)

まだ世に出る前の荻村伊智朗という人とおばさんの間にいろいろな2人にしかわからぬ物語があるというのを、失礼ながら荻村さんの日記から、その言葉から、僕はそれを物語の中に組み入れていく。天国の荻村さんからしたら、お前、勝手に何をしているんだという話なのですけれども、僕も向こう行ってから謝らないといけない。こういうことを物語の中に入れてしまうというのはノンフィクション作家としての必然性、これは僕にとっては必然なのですけれども、荻村さんにとっては、これは必然ではないと怒られると思うのですが、こういうふうなおばさんとの葛藤がありました。

9月7日 笑いを忘れた日

これは卓球関係者の間でも有名なフレーズなのですが、荻村さんは全日本の軟式の選手権で優勝して、ある種一つの達成感を得て、次に硬式の全日本で卓球をやめようと思ったのです。いくら一心不乱にやってきても、卓球で飯を食うとか、卓球で生涯を貫くなんて、当時は現実的ではなかったので、おばさんにもそれを伝えて、これで最後にするよと言っていた。その大会の予選だったかで負けてしまうのです。その日の夜つづった日記は、タイトルが「笑いを忘れた日」です。

もう卓球をやめられない。

負けてやめるのは挫折だ。

今までの一心不乱の何年間かが挫折だ

なんて承知できない。試合で負けるというのは、

ふだんが甘いのだ。

だから平常心をもっと鍛えないといけない。

(荻村さんの日記より)

それまでも、もうストイックの極だったのが、ますますストイックになっていく。これも偶然か必然かではないですが、勝負なので「もし」はないのですけれども、軟式を制した荻村さんが、全日本の硬式でも同じような結果、あるいは優勝に匹敵するような本人が満足できるような結果で大会を終えていれば、そこでラケットを置いていた可能性もある。ここで負けたっていうことが、後の荻村伊智朗の選手としてのキャリアを作った。紙一重のこの挫折があった。荻村の卓球を振り返る上で大きなワンシーンと言葉です。ここから荻村は一気にもう世界の頂点に向けて駆け上がっていくのですけど、そのくだりもいろんなドラマがあります。ロンドンで開かれた世界選手権。当時遠征費は80万で自己負担だったので無理だったのですけど、卓球場のみんなが頑張って街頭募金をして集めて、そのお金でロンドンに行って荻村さんは世界を制します。

偶然か、必然か…

おばさんに振り返ってもらう時に、おばさんと荻村さんの言葉の掛け合いみたいなものを思い出してもらって、それをシーンに落とし込むっていう作業が、僕がこの作品を書いている時、一番好きな作業でした。その中の一つが、この偶然か、必然か…荻村とおばさんが、言葉の交換をするというところで、僕が好きなのは荻村の周囲を敵に回しても自分を貫く自我と、おばさんの優しい、何だろう、人間性というか、会った人ではないと、このおばさんの柔らかさはなかなかわからないんですけど、それが同じシーンでぶつかる時、同じところにその2人がいるのを僕が再現する時、そのシーンを描くのが一番物書きとしては、楽しいというか、この物語の軸にしていきたいと思いました。例えばこういう偶然か必然かを巡って2人が議論をするっていうところですね。

「でも、ほんと人生って不思議ね」

久枝が荻村にそんな声をかけたのは、東京大会の余韻がまだ体の底に残っている頃だった。

「どういう意味ですか、おばさん」

「だって、あなたとわたし出会ったのは、すごい偶然でしょう。卓球のことなんて何も知らなかったわたしが、雑誌を見ただけで卓球場をひらいたのもほんと不思議な縁じゃない。そこへ現れたあなたがあんな舞台で世界一になる選手だなんて、すごい偶然と思わない？高島屋で働いていたころ、卓球場を開いてみんなのユニフォームを洗っている姿なんて想像もしなかったわ」

しばらく黙っていた荻村は、少し声の調子を強くして言った。

「いえ、おばさん。これは偶然じゃなくて、必然なんですよ。偶然と必然は結果が同じでも、絶対に違うんです」

(『ピンポンさん』第四章から)

これが、まさに今日のテーマの偶然か、必然か…。おばさんは偶然派。おばさんは全て偶

然、荻村は全て必然、こういう感じの2人のコントラストをちょっと頭の中に入れてほしいなと思います。

荻村伊智朗の言葉力



身体文化であるスポーツの場合、“人間能力の限界への挑戦”という目標の方が、“時代の選手に勝つことの工夫”という目標よりも、はるかに高い。

“時代の選手に勝つ”という低い次元の目標にとらわれると、もしさの時代の選手のレベルが低い場合、低いところで自己満足するところがおこる。

言葉力に特化して、スポーツが持つ力、可能性をどう言語化していくかというテーマを掲げた時に、僕もスポーツをフィールドの中心にして何年もやってきたのでいろいろなアスリートの言葉に触れるのですけど、荻村伊智朗さんは突出した言葉力、アスリートの枠を超えてスポーツをしっかり言語化できるというすごい人だと思います。

そのいくつかをちょっと皆さんにも紹介します。写真の右側に写っているのはさっき言った莊則棟という中国のスーパースターです。

そういう観点でこの人は卓球をやっていたのかと僕もびっくりしたんですけども、こういう言葉をどんどん残していきます。

ピンポン外交の“原点”



ピンポン外交の“原点”

祖国のため、もいいが、それではヨソ(他国)を否定することになる。それで人間が共存していくんだろうか。

矛盾があるんじゃないかな、と僕は思う。

日本の選手であろうと、中国、スウェーデンの選手であろうと、非常に充実したものを持っていて、世界のひのき舞台で立派な試合をやって、人間の文化の一端に少しでも光を増していく、ということができれば最高だと思う。

中国は今、卓球王国になっていますけれど、もともと中国に卓球を教えにいったのも荻村伊智朗で、当時の周恩来首相に請われて、卓球をしに行きます。もう一つスウェーデンでも、荻村さんがコーチとして行って、世界チャンピオンを輩出するようになります。当時、卓球日本と言われていたので、日本の卓球の技術、いろいろな練習方法も含めて海外に行くことを、多くの関係者は否定的に見ていたのですが、荻村さんはこういうビジョンを常に持っていたということです。

統一コリアチーム結成。1991年世界選手権千葉大会

これは有名な統一コリアが8連覇を止めて中国の女子団体の制覇を止めました。この言葉は大会が終ったあとに、荻村さんが両国、北朝鮮と韓国とのそれぞれの関係者の元へ行った時の言葉で、両国の関係者に「次は世界選手権を朝鮮半島でしましょう」と。

統一コリアチーム結成 1991年世界選手権千葉大会

団体戦が終わったあと、
世界各国の代表選手は平壌からバスで
板門店を通って韓国にはいるんです。
その様子を世界中のメディアが伝えれば、
朝鮮半島を取り巻く環境が大きく
変わるかもしれません。



どういうことかというと、団体戦を北朝鮮でやりましょう。そのあと平壌から板門店を通って選手団は韓国にバスで入る。その様子を世界中のメディアが伝えれば、朝鮮半島を取り巻く環境が大きく変わるかもしれません。統一コリアを千葉で結成してすごい感動が生まれて民族がひとつになれば、最強中国にも

勝てるという朝鮮民族をすごく奮い立たせたことで満足してないのです。

ちょっと古い昔を振り返ります。多感な時期に戦争を経験して、戦後はもう1年ごとに教育のいろいろなシステム変わってしまうという時、荻村さんはスポーツが救いだった。スポーツにかける情熱の発露というそこが、自分たちはこういう世相の中でスポーツと出会った。

私たちの場合、大げさに言えば、日本民族の初体験的なことが多い。
軍国主義時代、戦争、空襲、被占領、与えられた民主主義、混乱した世相。
スポーツは救いでもあった。

(荻村さんの言葉)

モスクワ五輪を日本がボイコットしたことについて

よく言われますけど日本は政府の閣議決定に対してスポーツ界もそのままボイコットしたのですけど、イギリスとかフランスとかはスポーツ界の責任で出て国旗国歌を使わないという形で出場しているのですね。荻村さんはもし参加していたら、それに対してもっとはっきりモノを言えたのではないかということを言葉として残しています。

スポーツに求められているのは、
政治からの自立です。
日本のモスクワ五輪ボイコットがよかったのか。
いま考えると、ボイコットの意義はなかったと思う。
もし、参加していたら、日本はソ連に対して
もっとはっきりモノをいえたのではないかですか
(荻村さんの言葉)

これがさっきの言葉に似ているのですけれども、

自分たちの苦闘というものが
ほんの小さいながらも人間の文化に
少しでも輝きを増させる。
そういう歴史の中に生きているんだ
という考えがあれば、
かなりの苦しさにも耐えていけると思う。
僕は勝っても負けても、
そういう気持ちでやってきた。
(荻村さんの言葉)

こういう気持ちでやっているアスリートは現代ではなかなかいないと思うのですけれども、逆に今のアスリートたちがこういう荻村さんの言葉をどう受け止めていくのかみたいなものも、僕の仕事のひとつかなと思ったりもしています。

どこに物語の源泉があるのか。

もう荻村の言葉力だけで多分 1 冊の本ができるし、荻村語録っていうだけでもノンフィクションの一冊の本になるでしょうし、研究書としても出来上がるかもしれません。ですが、僕はあくまで物語の源泉はこの武蔵野卓球場という舞台がまずあって、そこを荻村が初めて訪ねたシーンだと思います。

これも第一章からですけれども、荻村さんは都立西高に通っていて、そこの卓球部の連中が新しくできた卓球場の上原さんに「うちに変な奴いるんだよ、荻村といって卓球ばかりしている」。おばさんはそういう噂を聞いていたので、このやせっぽちの高校生が現れた時にこの人かなとおばさんは思ったらしいです。

荻村が初めて武蔵野卓球場を訪ねたシーン

やせっぽちの高校生が卓球場に現れたのは、その翌日だった。

番台にいる久枝の姿が目に入らないかのように半畳のたたき土間から身を乗り出し、卓球場のなかをのぞきこんでいる。色白でこけた頬に、くっきりと目立つ太い眉。雨も降っていないのに、学生服の上に灰色のレインコートを着ていた。

しばらくして久枝の視線に気づいたのか、初めて顔を見る少年は番台に向けて口を開いた。
「この卓球場には、誰か強い人がくるんですか」
(『ピンポンさん』第一章から)

荻村さんは、おばさん上原久枝さんの姿が目に入らないかのように、窓から身を乗り出して、卓球台を覗き込んでいる。その時の荻村の格好を、おばさんは鮮明に覚えていました。

これも実を言うと、初めて会った近鉄百貨店の食堂でおばさんから聞いて、僕はこのシーンをその日に書いているのですね。その日に東京から帰る新幹線の中で、ばあっとノートに書きました。今でも覚えています。ここから荻村さんとおばさんの出会いが始まりました。

荻村さんは、先ほど紹介した『地球の中の別世界』という40年史に詩だけでなく「卓球場あれこれ」というタイトルで書いています。そこで荻村さんが自分の筆でおばさんと初めて出会ったシーンを振り返っている記述があります。

半帖のたたき土間でみることにした。首を出せば全部もみえる。まん中のコートだけみればいいのだ。どんな人がやっているのか、みきわめてからでないと。なにせ西高から歩いて三キロ、電車賃を節約し、母親の古本を売った金をポケットにうわさの新しい卓球場をみにきたのだ。値しない金は遣えない。押し入れのなかに山と積んであった本もあらかた奥の列は売ってしまった。やがて母が気づくことになろう。前列が崩れでもしたら一ぺんだ。

たいしたことはないな。明るい雰囲気で背も高い人が回しているけど、間違いなく俺が勝つだろう。今日はやめとこう。

『あがっておやりになったら？』と、玉をころがすような声がした。

少なくとも母の声とは異質ののどから出ている音だ。

(『地球の中の別世界』から)

荻村さんが初めて卓球場を覗いて、おばさんから声をかけられた日です。

おばさんは、僕の取材には「ここには強い人が来るのですか」というのが荻村さんの第一声で、荻村さんからすれば「あがっておやりになったら」というのが、おばさんからの第一声だったのですね。

僕の大きな、大きなテーマもここです。最初にお伝えしたように『地球の中の別世界』をおばさんと会った日に最初に見ています。『地球の中の別世界』で「詩」に一番心動かされ、他の人のおばさんへの思いに心を揺さぶられたのですけど、物書きとして何をこの作品のテーマにするかっていうともうこの一点なのです。

お母さんという存在はもちろん大きいのだけれども、荻村さんは卓球場を覗いたその日に明らかにお母さんと違う声を持っている人と出会った。そこからもう嘘のような、もう映画でも描けないような2人の長い長い関係が続いていくので、ノンフィクションですから僕が勝手に言葉を作れないで、荻村さんが残した言葉から物語の核を作っていくという形です。

そういう意味において、荻村さんも鬼のような言葉力がありますし、おばさんも、記憶を振り返ってもらってすごく的確な言葉で、その時々の記憶を鮮明に言葉にして僕に伝えてくれるので、このテーマを追いかけていくのに時を重ねれば重ねるほど、物語の何でしょう、密度が濃くなるというか、そういう経験をこの作品を通じてすることができたかなと思い

ます。

ピンポンさんのラストシーン

よく聞かれる質問の一つに、『武蔵野のローレライ』という原型の美しい響きがあるのになんでこんなタイトルにしたのですかと、僕は『武蔵野のローレライ』が好きですという人が結構いらっしゃいます。これラストシーンなのですけど、

十一回目の「智久会」の準備を始めようとしていた二〇〇六（平成十八）年九月、久枝のもとへかわいらしき声で電話がかかってきた。

直美の二女、友里恵からだった。小学生の頃、久枝がおこづかいをあげるとすぐに本屋に走っていた文学少女の友里恵は、中学で卓球を始めたばかりだった。

「おばちゃん、三鷹の小さい大会だけど、ユリ、初めて優勝したの」

「えー、すごいじゃない。ユリ、よくがんばったわね」

「でも、おばちゃん、ほんとに小さな大会なの」

「大きくても小さくても、大会で優勝するってすごいことなのよ」

久枝は受話器の向こうではにかんでいる友里恵の顔を思い浮かべながら、「きっと、天国のピンポンさんも喜んでいるわよ」。

そう声をかけると、丸くなった背中をすっと伸ばした。

（『ピンポンさん』終章から）

ここでポイントなのは、おばさんにいろいろなシーンを振り返ってもらっている時に、言葉のやりとりの再現をしてもらうわけです。一つ一つおばさんが再現してくれて、きっと天国のピンポンさんも喜んでるわよっていうふうなことをユリちゃんに伝えたっていう事実を聞いたから、『ピンポンさん』というタイトルにしたのです。荻村伊智朗という人がお孫さんにピンポンさんと呼ばせているのは知っていたし、それもいいかなって思って、編集者の人もピンポンさんも悪くないよねというのが初めてピンポンさんって響きを聞いた時からあったのですけれどもでも、こういうシーンがなくて単にお孫さんが荻村さんピンポンさんと呼んでいるだけでタイトルにするのはちょっと抵抗があったのです。でも、おばさんの取材の中で、ユリちゃんとのやりとりを聞くと、こういう話だったので、この話を最後に持つていけば、タイトルは『ピンポンさん』いけるかなというふうにして思いました。これは物語の最後ですけど、こういうシーンでした。

『ピンポンさん』あとがきから

確かにぼくは生前の荻村さんを知らないが、上原久枝という女性に背中をおされる感覚は身に染みて理解できる。荻村伊智朗さんにとて、おばさんの存在がいかに大きかったか、そのことだけは実感をもって理解できる。

その共感が、僕と荻村さんをつないでくれる唯一の絆だった。

荻村さんが亡くなった後、僕が追いかけているので、僕はこういう書き方しかできなかつたんですけど、おばさんに背中を押される感覚、これはもう僕も身にしみてわかるんです。僕の経験でいくと、新聞社を辞めて、卓球の世界選手権が大阪であって、おばさんが世界選手権に合わせて大阪に来はったのです。卓球場の皆さんと晩御飯を食べて、おばさんをホテルにみんなで送って、僕がやっぱりちょっと 1 人で飯を食えるか不安かなという話をしたのです。その別れ際に、おばさんがもう言葉じゃなくてガッツポーズを僕の前で。それだけで背中を押される感覚っていうかそれが唯一、絆というふうに書いて、くどいんですけど、

荻村の言葉力はすごくて、それをメインにした本なのだけど、おばさんの存在をこの作品の中で一番多くの人に伝えたかったかなっていうふうに物語ができる前の自分を振り返つていけばいくほど、セミナーを引き受ける前よりも一層おばさんへの思いが強くなったかなというふうに思います。

<黒田 勇（理事・関西大学名誉教授）のコメント>

スポーツをどう言語化するか、我々にとって大きな課題その中では、まさにスポーツノンフィクションの力を改めて私は理解しました。それから、このピンポンさんについてはやはり上原久枝さんが主人公なのだなというのを改めて感じました。なんか朝の連続テレビ小説になるなど。まさに貧しくも頑張った戦後日本人の物語で、久枝さんを主人公として、そこに荻村が絡んで戦後の日本を描くというようなそういうノンフィクションだったし、本当に 1 年間のドラマでも十分耐え得るなと思いました。

子ども未来・スポーツ社会文化研究所季刊誌第6号（2022年秋号）

発行日 2022年9月30日

編集・発行者：子ども未来・スポーツ社会文化研究所代表理事 杉本厚夫

編集委員：西山哲郎、速水 徹、谷口輝世子、三角さやか（幹事）

一般社団法人 子ども未来・スポーツ社会文化研究所

Research Institute for the Future of Children and Sport Social Culture

<https://fcssc2020.jp> E-mail:info@fcssc2020.jp

